



第38回夏期 ジュニア大使友情使節団

～ブルネイ班、4回目の実施～

IFAは、第38回夏期ジュニア大使友情使節団をブルネイ・ダルサラーム国に、事前研修を含め2025年7月26日から8月1日まで7日間の日程で派遣した。ここに参加団員たちの旅の記録を紹介する。

【7月26日(土)】

今日は団のみんなと初めて会い、結団式や外国での過ごし方などについて講義を受けました。日本文化紹介の練習もしました。結団式のころは、僕もみんなも緊張していて、あまり声がありませんでしたが、だんだんと仲が深まっていたと思います。ブルネイがより楽しみになってきました。

【7月27日(日)】

いよいよ出発の時。11時45分にブルネイへと旅立ちました。驚いたのは、機内にもヒジャブをした女性がいたこと。改めて、イスラム教の国に来たことを実感しました。飛行機を出た瞬間、

熱気に襲われ日本よりも暑いと感じました。とても優しいガイドさんたちに出会い、旅がスタート。ナイトマーケットでは果物や鶏のしっぽの焼き鳥などに挑戦し、とてもおいしかったです。夜、ホームステイ先が発表されました。緊張しますがとても楽しみです。

【7月28日(月)】

中学校に行き、現地の先生と生徒に会いました。朝会でイスラム教のお祈りを聞き、それから図書室などの施設を見学。マレー語、物理、家庭科などの授業に参加しました。マレー語の授業は全てマレー語で行われていたため、何を言っているか全く理解できませんでしたが、少しマレー語を読むことができたので達成感を感じました。家庭科ではチョコスコーンを作りました。

夜にはホストファミリーに会い、日本文化を紹介しました。みんな日本の文化に驚いてくれてとても嬉しかったです。ブルネイに昔からある踊りを一緒に踊りました。曲がとても陽気で、衣装や道具もとても美しかったです。

【7月29日(火)】

MIB (Melayu/マレー系、Islam/イスラム教、Beraja/王政) の授業では昔から伝わっている歌を歌いました。私たちが「赤とんぼ」「幸せなら手をたたこう」を披露しました。「幸せなら手をたたこう」のマレー語版があると知ってとても驚きました。

昼食後、日本の文化である折り紙、紙風船、けん玉、書道を紹介しました。着物姿を見て「かわいい」と日本語で

言ってくれてとても嬉しかったです。ブルネイの文化である、楽器、ボードゲーム、手遊びなどを体験しました。



【7月30日(水)】

ホームステイ先の子の小学校でホストマザーが担任をされている教室に行くと、とても歓迎してくれて嬉しかったです。次に、モスクを訪れました。モスクは予想以上に大きく広がりました。ホストファミリーから色々とお話を聞いて、ブルネイにはイスラム教信者が多いが、キリスト教、仏教の信者も一定数いるのだと知りました。次に、在ブルネイ日本国大使館に菊田豊大使を表敬訪問しました。滅多にない特別な機会、大使館は他国と日本をつなぐとても大切な機関だと知りました。日本がとても恵まれていることに感謝するべきだと思いました。

【7月31日(木)】

夜のお別れの会では、学校で会った方々とたくさん話をして、TikTokやお別れの写真を撮りました。ホストファミリーとも写真を撮り、ありがとうという気持ちを込めてお別れをしました。(参加者日誌より抜粋、校正：編集)

世界万華鏡

国際交流・コーディネーター 小^{おやま}山^{まゆみ} 麻由実 シリーズ 19 コスタリカ

皆さんは「オーパーツ」をご存じですか。ナスカの地上絵のように、発見された場所や時代にそぐわないと考えられる出土品や加工品のことです。Out Of Place Artifacts の略で OOPARTS、「場違いな工芸品」と訳されます。今回はコスタリカのオーパーツ、ディキスの石球を紹介します。

●コスタリカ国立博物館

世界を旅している中でコスタリカ首都、サンホセにたどり着いたのは、2016年の12月。南半球なので、夏の気候でした。本当はそこから車で4時間ほど南下したディキス地方まで行き、ジャングルの中にある球体を見たかったのですが、時間的に難しくサンホセのコスタリカ国立博物館へ行きました。

黄色いお城のような建物で、中に入るとまずはコスタリカらしい自然のコーナー。緩やかにカーブする熱帯植物園の中を上っていく道中に、無数の色鮮やかな美しい蝶たちが飼育されていました。このコーナーを抜けると空間が開け、中庭にたどり着きました。

●ディキスの石球はどこに

中庭に出ると、大人の身長位大きな

ものから、膝下位のサイズまで、丸い大きな石の球が点在していました。しかしどれも見てみたかった「真球」と言えるほど丸くはありません。



ディキスの石球にオーパーツ説がある理由の一つに「ほぼ真球である」ことがあげられます。理論上の真球との最大誤差が0.2%のものや、2つの石球の直径が、2.0066メートルとミリ以下の単位まで全く同じものがあるというのです。さらに素材にも謎があり、近くで産出される花崗閃緑岩が主なのですが、近くと言っても十数キロ離れていて、そこには石切場の跡は残されていないのです。

真球の石球を目指して再び建物の中に入ります。館内にはコスタリカ全土から出土した壺や石板等々、所狭しと展示されています。そしてその先についに巨大な丸いほぼ真球の石を発見。

●神秘的なディキスの巨大石球

小柄な大人の身長位ある巨大な石の真球は、裏側から見てもほぼ真球で、とても不思議。石球の正確な製作年代は不明で、周囲に存在していた遺構の年代から推定して、西暦300～800年有力視されています。

石球の配置には規則性があり、星座など天体を模しているという説もありますが、石球が持ち出されたり、黄金が入っているとの噂が流れて破壊されたりしたため、今では正確な配置がわからないそうです。近年、球体の表面に彫刻が発見され、彫られた線が星座を現しているという見方もあります。

球体への加工は、まず加熱と冷却を交互に繰り返して徐々に表面を崩していき、球体に近づいたところで同種の固い石で表面を何度も叩いて整形し、最後に磨き上げたとされます。しかし、それだけの手間暇をかけて、なぜ真球に近づけようとしたのかは未だに謎。まさに不思議なオーパーツなのです。

令和7年8月17日発行
一般社団法人 国際フレンドシップ協会
〒106-0041 東京都港区麻布台3-4-12
麻布台ロイヤルプラザ703
発行責任者：及川 伊佐子
編集 集：事務局 03(3582)3021
印刷：ダイト印刷株式会社